

デイリー・ジーザス・ニュース #229

イエスのエルサレムへの最後の旅

イエスは結婚と離婚について三度目に教える

マタイ19.3-9 (並行テキスト：マルコ10.3-12)

マタイ3章3節 パリサイ人たちがイエスを試そうとして近寄ってきて、こう尋ねた。「何かの理由で妻を離縁するのは、律法に定められているでしょうか。」

4 「読んでないの？」彼は答えた。「創造主は初めに人を男と女に創造し、5『それゆえ、男は父母を離れ、妻と結ばれ、ふたりは一体となる』と言われたのですか。」（創世記2.24）

6 「それゆえ、神が結び合わせたものを、私は人々に引き離すことをやめるように命じます。」

7 彼らは尋ねた。「では、なぜモーセは、夫が妻に離婚証書を渡して去らせるように命じたのですか。」

8 イエスは答えた。「モーセは、あなたたちの心があまりにも頑固だったため、妻と離婚することを許した。しかし、最初からそうだったわけではない。」

MK その後、家の中で弟子たちがこの件について再びイエスに尋ねました。

MT 9 「わたしはあなたたちに言います。不品行以外の理由で妻を離婚して他の女と結婚する者は、姦淫を行うのです。」 MK また、もし彼女が夫と離婚して他の男と結婚するなら、彼女もまた姦淫を犯すことになる。」

=====

注: 私たちは「混合テキスト」の原典福音書を次のように上付き文字で識別します: マタイ = MT、マーク = M、ルカ = L、ヨハネ = J、使徒行伝 = A。この「上付きID」は引用文の冒頭に挿入され、別の上付き文字が現れるまでその聖書書を識別します。さらに、赤いイタリック体はイエスの言葉を示します。旧約聖書の引用は大文字で書かれています。

コンテキストダイジェスト

位置	エルサレムへの道のどこか
タイムライン	3月（38月）
イエスの生涯の文脈	第7段階：ペレアにおけるイエスの宣教
	C. イエスのエルサレムへの最後の旅
タイトル	7. イエスは三度目の離婚について教える

コメント：

デイリー・ジーザス・ニュース #229

ガリラヤとサマリアの境界に沿って旅をした後、イエスはヨルダン川の東側にあるペレアへと渡り、エルサレムへの最後の旅を続けました。これは、ガリラヤからエルサレムへ向かう巡礼者のほとんどが選んだルートでした。彼らはサマリアを完全に避けたかったのです。

ペレアでの最後の日々に、イエスの生涯における5つの重要な教えと出来事が起こりました。そのうち3つは、弟子としての家族生活に関するものです。今日の教え、つまり結婚と離婚に関する教えは、その最初のものです。

イエスは離婚と再婚について、すでに二度語っておられます。一度はガリラヤでの「山上の教え」（マタイ5:27-32... DJN #68）で、そしてそれより前のペレアでの教え（ルカ16:18）です。どちらの場合も、イエスはほぼ同じことを教えられました。（イエスが離婚について最初に言及されたマタイ5:27-32を参照してください。ここでは同じ解説は繰り返しません。）

福音書にイエスの離婚に関する教えが三度記されていることは、この問題がイエス自身、弟子たち、そして初期の教会にとっていかに重要であったかを物語っています。ここでもイエスは、結婚という重要な制度に関する周囲の文化や異教の考え方とは対照的に、神の結婚観に自らを当てはめていました。

今日の朗読では、パリサイ人たちがイエスに近づき、彼らが計画していた死刑に値するような発言をイエスにさせようとした。イエスの時代には、離婚について二つのラビの教えがありました。

ラビ・ヒレルは、申命記24章1節のモーセの離婚に関する戒めは、法的手続きを従う限り、いかなる理由であっても離婚を認めるという「リベラル」な立場をとりました。一方、ラビ・シャマイは、不貞（未遂か成功かに関わらず）を除き、離婚は認められないという「保守的」な立場をとりました。イエスの立場はシャマイに近いものでしたが、その根拠は神中心主義に特化していました。

イエスのもとに来たパリサイの人たちは、夫がいかなる理由であっても離婚を許すという、ヒレルの結婚観（夫の離婚権は妻の方がはるかに制限されていた）に従っていたようだ。律法主義者であった彼らは、離婚手続き自体において律法の文言が遵守されている限り、いかなる理由であっても離婚は正しい行為であるとの前提に基づいて行動していた。彼らは申命記24章1節にあるモーセの離婚に関する戒めを、自分たちの利益のために解釈したのだ。

一方、イエスはすぐに神の結婚観について語り始めました。それは、コミュニケーションと相互尊重によって築かれる、愛に満ちた協力の結びつきでした。結婚に対するこの意図は、神と共にあっても変わることはありませんでした。しかし、罪深い男たちは神から与えられた役割を果たせず、モーセの時代には、妻たちは離婚手続きにおいて虐待され、搾取されていました。そこでモーセは、離婚手続きに関する命令を与え、その損害を最小限に抑え、抑制しようとした。そもそも離婚が起きた唯一の理由は、配偶者に対する敵意によって心があまりにも硬くなり、もはや愛に満ちた行動をとることができなくなつたからでした。

イエスは、離婚は心の問題であり、法的手続きを除くと述べて、問題の核心を突いた。もし人が単に再婚するために離婚を希望しているのであれば、その行為を善行に変えることはできない。ヒレルの教えによれば、書類手続きが適切に行われている限り、そのような行為には何ら問題はない。

ディリー・ジーザス・ニュース #229

イエスは彼らに、そして私たちに、忠実な配偶者と離婚するほどに他人を欲することは、それ自体が既存の配偶者に対する姦淫の態度であると告げていたのです。適切な書類手続きを経たとしても、既存の配偶者に引きずられた頑なな心を清めることはできません。

イエスは、あらゆる状況において離婚は間違っていると教えたわけではありません。弟子たちは、互いの関係ではなく、イエスとの関係において、神が定めた一体性を追い求めるよう召されていると教えたのです。

「わたしがまずあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」という言葉は、キリスト教の結婚生活に深い意味を持っています。

応用：

弟子となるということは、私たち自身の考え方、価値観、そしてイエスに対する態度を改めていく過程であるという原則を、改めて理解することになります。結婚に対する文化的な見方は変化します。しかし、主が結婚のために立てられた計画と備えは変わりません。クリスチャンは、結婚を含む人生のあらゆる人間関係において、イエスの「わたしがまずあなたを愛したように」という原則を適用します。つまり、私たちは、私たちと同じようにイエスを信じていない人々とは異なる視点で結婚に臨むということです。

「わたしがまずあなた方を愛したように、あなた方も互いに愛し合いなさい」というイエスの戒めは、あなたの現在の結婚生活や家族関係にどのような影響を与えているでしょうか。

今日、イエスがすでにあなたに示したのと同じ愛の行為をあなたの配偶者や家族に示すことによって、具体的にどのようにイエスに従うことができますか。